

「海洋王国・琉球—その歴史、文化」

琉球大学名誉教授

高良 倉吉氏



【略歴】

1988年沖縄県浦添市立図書館館長、1994年琉球大学法文学部教授、2013年沖縄県副知事。専門分野は、琉球史、特に琉球王国の内部構造、対外関係を研究。1993年博士（文学）九州大学。

「琉球の時代」で沖縄タイムス出版文化賞（1982年）、「琉球王国の構造」で沖縄文化協会賞（1988年）、琉球王国史研究で沖縄研究奨励賞（1997年、沖縄協会）、国際交流奨励賞（2004年、国際文化基金）。「琉球王国」（1993年、岩波書店）、「琉球王国史の探求」（2011年、榕樹書林）など多数の著作がある。

●はじめに

ご紹介頂きました高良でございます。今日、私はスライドとかパワーポイントを使わないのですが、皆さんにお配りした紙がありますので、ちょっとそれを確認させて下さい。紙の資料が4頁あると思います。一応私が今日お話をさせて頂くメニューのようなものを書いてあって、2頁が資料のAから資料Cまで。それから3枚目が沖縄の歴史の流れが分かるようなメモが1つ。それから4頁目が今日の私がお喋りをするテーマの琉球王国時代の海外との交流を示す地図があると思いますけどよろしいでしょうか。

では時間が限られておりますけども、今日の「海事立国フォーラム in 沖縄」の趣旨に相応しいかどうか分かりませんが、かつて沖縄の先人たちが当時は琉球と呼ばれていたわけですけど、その時代のアジアとの交流の状況について、そのいくつかのポイントを皆様にご説明できたらというふうに思います。少し時間を残しまして、後で皆様に、もしご質問がありましたら質疑応答の時間も設けたいというように考えております。

●琉球王国「大交易時代」

～琉球王国とアジア諸国との交流～

まず4頁を見ていただきたいと思います。下の方にタイトルが書いてありますが、当時琉球王国と呼ばれた沖縄が、どういう広がりを持ったアジアとの交流をしていたのかという状況を、私が作成した地図ですけども、この地図を使って最初に話をしたいと思います。この地図に描いた時代は、ここに書いてありますように14世紀の末から16世紀の後期ですから、日本の歴史でいけば、大体平安時代が終わって鎌倉時代が始まった時代から16世紀の後期ですので、織田信長とか豊臣秀吉と、あるいは徳川家康というスーパースターが登場する時代までという時期に限定して書いたものですが、その時期の琉球王国がどのような地域と交流をしていたのかということをもろろん地元の琉球側の資料、それから交流相手国の資料、その他外国の資料等色々使いながら、私なりに地図に描いた世界を実際に現地に行ってみて、地元の先生方に色々教えてもらったりしながら作った地図が4頁の地図です。

ご覧頂いて分かると思いますが、当時琉球王国の国際交流の交通の拠点は那覇港という港が拠点でありました。そこから琉球の船は北の日本の本土、この当時の日本の代表的な国際貿易港は今の鹿児島県の坊津であったり、福岡の博多であったり、それから大阪の堺であったりするわけですが、そういったところに頻繁に琉球の船が出入りするといった状況でした。そしてさらに対馬海峡を越えまして、朝鮮半島に頻繁に出入りしてございまして、この当時の朝鮮王国の代表的な国際貿易港は釜山でしたが、そこに頻繁に出入りをしております。

そして最も注目すべきことは、沖縄の西に横たわっている東シナ海、中国人が東の海、東海と呼んでいる海ですが、そこを越えて中国大陸に頻繁に出入りしてございまして。今、福建省という省がありますが、その中心的な貿易港だった福州とか泉州というところに入出入りしてございまして、そこを拠点にして中国の政治の首都だった北京にも頻繁にでかけるという交流をしております。福州から北京までの直線距離が大体 3,000 キロメートル位ありますので、その 3,000 キロを北京まで往復するという活動もしていたわけですね。

さらに注目すべきことは、この当時の琉球王国はさらに南の世界に展開をするということです。南の方には南シナ海、中国で南海といっている大きな海があります。その南シナ海を囲むように存在している東南アジアの諸地域があります。現在のフィリピンでありますとか、色々な国々がありますけれども、その主要な国に大体琉球の船が出かけていると。ルソンと呼ばれたフィリピンにも行ってございまして、それからベトナム、当時安南と言いましが、その貿易港にも行ってございまして。さらに南下して、現在のタイ、当時シャム王国と呼ばれた、都がアユタヤと、世界遺産になっている古い都がありますけれども、そこに毎年のように行ってございまして。そして現在はタイの南部、マレーシアとの国境地帯がありますが、パタニという国際貿易港にも行ってございまして。

それから現在のマレーシアにありますが、マラッカという当時は東南アジア最大の貿易センターと呼ばれた場所にも頻繁に出かけてございまして。それから赤道を越えまして、スマトラ島のパレンバンでありますとか、ジャワ島のカラパ、グレシクといういずれも全部国際貿易港、特にこのジャワ島の東のグレシクというところは、当時はスパイス貿易の拠点だった港ですけれども、そこにも琉球の船が出かけているとい

うわけです。つまりこの4頁の地図でご覧頂いてお分かりになりますように、この14世紀の末から16世紀後期の琉球王国というのは、まさに東アジア世界と東南アジア世界というアジアの主要な地域に頻繁に出かけて交流をするという状況だったことが明らかになってきます。

～万国津梁の鐘～

この地図を作る中心的な資料は、実は琉球側に『歴代宝案』と呼ばれる大変重要な資料があります。これは後で説明しますが今この外交文書に相当します。相手国の国王であるとか皇帝であるとか、その他政治的なナンバーワンに宛てた外交文書が残っておりまして、また相手国からもたらされた外交文書もちゃんと写されて残っております。そういった資料を使うと、このような壮大なアジアとの交流が行われていた。この時代のことを、沖縄の歴史を理解しようとする皆さんにインパクトを持って理解して頂くために、1頁に戻りますが、「大交易時代」というふうに名前を付けました。まさにアジアに羽ばたく大きな時代を作ったのだというわけです。そしてこの時代に東アジア、東南アジアという世界に羽ばたいた当時の琉球の人間が書いた記録が残っておりまして、それが2頁です。2頁の資料のAをご覧いただきたいのですが、「万国津梁の鐘」と呼ばれている梵鐘です。1458年の年代が入っているものですが、非常に長い文章が刻まれています、その冒頭の文章のみを引用しました。しかも古い漢文で書いてありますので、私の方で少し読みやすいようにしてあります。

こういうふうに読みます。琉球国は南海の勝地にして、三韓の秀をあつめ、大明を以て輔車となし、日域を以て唇齒となす。此の二の中間に在りて、湧出する蓬莱島なり。舟楫を以て万国の津梁となし、異産至宝は十方刹に充滿せり。その意味は、わが琉球は南海、南の方の海、これは東アジアの中では南の方に位置しますので、その南海の海。勝地というのは一番優れた場所という意味で、優れた場所に位置しているという意味ですね。三韓は朝鮮半島のことを指します。昔、朝鮮は馬韓、弁韓、辰韓と3つの国に分かれていまして、3つの国を総称して三韓と言ったのですが、これは朝鮮半島という意味ですね。「朝鮮の秀」ですから、優れた文化ですね。「大明」は中国です。中国はわが琉球と輔車の関係だ。輔車とい

うのは、今の車で言えば車輪とシフトに当たるもの。ようするに軸です。両方がなければ動かない、つまり一体的な関係だという意味ですね。それから日域というのは日本を指します。日本とは唇と歯の関係だと。これも一体、最も親しい関係だという意味ですね。これらの国々の中間にあつて、海から湧き出た蓬莱島のような、パラダイスのような国だと、自分のことを自慢しているわけです。

次が大事ですね。「舟楫を以て万国の津梁となす」と。「舟楫」というのは船を指します。船を操って万国、これはアジアです。津梁というのは架け橋ですから、アジアの架け橋の役割を果たしていると。その結果、わが琉球には「異産至宝」、アジアの様々なお宝が満ち溢れているという意味になります。

まさに4頁に示した地図、この地図に示したような、東アジア、東南アジアという地域と活発に交流し、そして船を使ってまさにアジアの架け橋の役割を果たしていた当時の琉球の人間たちの気概と言いますか、自分たちの活動を自慢してみせた資料ということになります。

●琉球王国ばなぜ「大交易時代」を実現できたのか

～大明帝国の政策—冊封と朝貢～

問題はですね、ここまでは単なるお国自慢であります。私は、歴史の勉強というのは、そういう状況を知った上で、なぜそういうことが実現できたのかという問題を考えることがとても大事だと思います。つまり、なぜ4頁に示すような非常に広がりを持った壮大な交流が可能になったのか、その原因は何なのか。どういうパワーや能力があつて、そのようなことが実現できたのかということが問題になります。

それで1頁に戻って頂きたいのですが、なぜその時代を実現することができたのかという問題ですけれども、いくつかの理由があります。今日は細かいところまでは説明できませんが、ポイントのみを説明したいと思います。1つは、当時の中国、大明と言いましたが、世界最強の国家の1つだった大明帝国がとった政策と、そしてその国が特に琉球に対する一種の優遇策と呼ばれるものを推進したことに注目する必要があります。

その政策に関わる部分ですけども、何かというと、そこにメモを作りました。冊封(サツポウ)と朝貢、

学問的には冊封（サクホウ）と言います。簡単に言うと、中国の皇帝がアジアの国々の王の地位を認めるということです。中国と他の国々は対等ではありません。中国からすると、自分より格下なんですね。従って、例えばベトナム－安南の王がおりますと、その王の地位を北京の中国の皇帝が認知する、これが冊封です。それに対して認められたベトナム－安南の王は、皇帝に忠誠を誓うために朝貢するわけです。貢物を持って行って、古い言葉でいうと、まさに臣下の礼をとるということになります。その従属的で対等ではない、一種の外交関係が、冊封と朝貢と呼ばれるものでありました。

この政策が、周辺のアジアの国々に大きな影響を与えたのは、この関係を受け入れなければ中国との交流・貿易を認めないということだったからです。中国のあの明帝国の側からすると、対外関係・貿易を中央政府が管理するという、管理型の国際関係というものを構築しようとした政策だったということでもあります。もちろん中国は当時の世界でスーパーパワーでありますから、アジアの周辺の国々は、中国との関係をちゃんと構築して、貿易をしたい。そして、中国はご存じのように世界最大の商品の産出国でもありました。経済大国でもありましたので、この経済大国との関係を築くためにその政策を受け入れるわけです。アジアの多くの国々がこの政策を受け入れて、中国の一種の従属国になって、そういう形をとりながらも中国との貿易や様々な関係を作っていくという、そういうことだったわけです。

当時の琉球も当然それを受け入れて、琉球の王の地位を皇帝に認めてもらって、そしてそのかわり忠誠を誓うために朝貢をする。その形式を前提にして中国との貿易交流を行うということ、アジアの他の国々と同じように行ったわけです。

～大明帝国の政策—貢期と入域港～

ところが問題は、貢期と呼ばれているものであります。中国に貢物を持っていきますが、中身は貿易です。その頻度を国毎に明の政府が指定するんです。全ての国が自由自在に中国にやってくることを認めない。国毎に、例えば安南、「お前は3年に1回来い」、別の国は10年に1回だと、そういうふうな一種の制限貿易という形をとるわけです。これが貢期と呼ばれた政策であります。そしてもう1つ、入域港の指

定です。海に開かれた様々な港が中国にはありますけれども、どの港にも自由に入ることは許されませんでした。国毎に利用する港が指定されます。今の中国の広東省、そこに広州という大きな町がありますが、そこは東南アジアの国々が入ってくる指定港です。日本は室町時代に中国に朝貢した時期がありますが、そのとき日本の船が利用できるのは浙江省の寧波という港です。琉球の船はですね、福建省の泉州という港が指定されました。やがて泉州から福州に港が変更されますが、泉州も福州も琉球の船のみが利用することを許された。他の外国船は許されなかったという事情があります。そういう入域港の指定が存在しました。

～明の海禁政策～

そしてもう1つ重要な政策は、当時の明が行った海禁政策という一種の鎖国です。中国人が自由に海外に出ることを禁じます。既に海外に住んでいる中国人が自由に帰国することについても、強い制限を加えました。中国版の鎖国政策です。ちょっと話題がそれるかもしれませんが、江戸時代に徳川幕府は鎖国という政策をとりましたが、江戸時代の資料の中に「鎖国」という言葉はほとんどありません。どう書いてあるかという、「海禁」と書いてあります。つまり、明の「海禁」という鎖国政策を参考に徳川幕府は江戸時代に鎖国政策といわれるものを行ったということでもあります。

アジアの国々は冊封を受け入れて、従属的な関係を結んで朝貢を行い、頻繁に中国に出かけて貿易しようと思ったら、貢期という制限がハードルになった。出入りできる港も限られていた。決定的だったのは、中国人がこの海禁政策によって、国内に閉じ込められてしまい、海外に自由に出て行けない。全体として、以前より中国人の海外進出するパワーがダウンしてしまう。その政策を破って外に出て行く者たちが、倭寇と呼ばれたり、海寇（カイコウ）と呼ばれたりする民間の貿易者ということになっていく訳ですね。要するに、経済大国である中国の商品が、東アジアや東南アジア、ひいてはアジアに供給されにくいという状況が生まれたのです。もっと乱暴に言ってしまうと、中国商品の品薄状況という事態がアジアに広がったのです。

～明の琉球優遇政策—断トツの朝貢回数～

そこで琉球に対する優遇政策の話ですが、結論から先に言いますと、琉球に対しては貢期と呼ばれている制限貿易を明は適用しなかった。琉球のみは1年に何回来てもよろしい、つまり制限がなかったということなのです。4頁の地図を見て頂きたいのですが、左上の方に表があります。見づらいかもしれませんが、これは明の歴史をまとめた『明史』という本から作成されたデータです。中国の周辺諸国から何回朝貢してきたかという公式データを、東京大学の村井章介先生が丹念に整理して作ってくれた表があり、それをコピーしたものです。『明史』に見るアジア諸国の対明朝貢回数という表を見て下さい。断トツ1位が琉球で、171回。2位はベトナム—安南ですが、琉球の半分程度の89回。室町時代の日本は19回です。4位のハミはタクラマカン砂漠にあるオアシス国家ですよ。それから6位のシャム、これは今のタイです。7位のトルファンも西の方の砂漠にあるオアシス国家です。琉球が171回で断トツだという事実は、琉球に対して貢期という制限を加えなかったために、アジアで最も中国と活発に交流できる地位というか、条件を手にしていたということを教えてください。

～明はなぜ琉球を優遇したのか～

問題は、なぜ琉球を優遇したのかということです。この問題については何人もの研究者が研究し、意見を述べています。多くの理由がありますがけれども、1つは、明という国の周辺はいわゆる倭寇と呼ばれた政府のコントロールの効かない、海を舞台にする民間パワーがしばしば海賊行為を行う、倭寇と呼ばれている民間パワーが展開していました。しばしば誤解されているのですが、日本人も含まれてはいますけれども、この時期はほとんどが中国人です。海禁政策、明の政策に違反する人たちですが、こういう倭寇勢力が琉球の島々に拠点置いて、そこから明の沿岸部を荒らしまわる、あるいは自由貿易を行う可能性があった。琉球の島々が倭寇の基地になってしまう。安全保障上の観点から、琉球をむしろ明の影響が及ぶ範囲に取り込もうという、今の安全保障上の政策として行ったというのが理由の1つになります。

もう1つは、明という国は、皆さんご存じのように、チンギスハーンが作った元という国があり、その元を滅ぼして出来上がった国です。元を滅ぼして明は建国されたのですが、まだまだモンゴルパワーは残っています。残存勢力を絶えず攻撃しながら、明という国の国家基盤を強化ししなければならなかったわけです。軍事作戦を展開するうえで困った問題がありました。モンゴル勢力を叩くためには移動手段としての馬が必要です。その馬の産地はモンゴル人に握られおり、馬が手に入らない。敵陣を攻撃する有効な武器として大砲、石火矢がありましたが、火薬の重要な原料である硫黄が手に入らない。馬が少ない、硫黄が足りない、という困った窮地を救ったのが実は琉球だったのです。

今の沖縄県からは想像もできないと思いますが、当時の琉球においては大量の馬が飼育されていました。そして、沖縄県の最北端は硫黄島という島ですが、そこでは大量の硫黄が採取されていました。その2つの品を、中国に提供したのです。平たく言うと、建国当初の明にとって、重要な軍需物資を提供してくれた琉球は恩人だったのです。貢期を適用しなかったばかりか、信じられないことですが、明は琉球に大型の船もタダで支給しているのです。船が傷んだ場合は、修理のほうもタダでしてあげたという例もあります。そのような、琉球優遇政策がとられたのです。

～琉球の中継貿易～

優遇政策、そして明が行った対外政策の結果として、琉球の役割が浮上しました。頻繁に中国に出かけて行って、福州で大量の中国商品を仕入れ、那覇まで運んできた。それをさらに船に積み替えて、北の日本や朝鮮、南の東南アジアに行き、中国商品を売るという活動を推進したのです。

そして、それぞれの土地、日本や朝鮮、東南アジアで特産品を買い付けて、それを那覇まで持ち込み、積み替えて中国に売るという、まさしく典型的な中継貿易の役割を果たすことができた。ですからお手元の4頁の地図は、中国商品を仕入れてこれを他のアジアの国々に転売する、アジア諸国の商品を中国に供給するという、国際貿易の役割を琉球が担っていたことを意味しております。

●国内体制の構築

～航海技術の導入～

しかし、中国の政策だけで、琉球の大交易時代を説明することはできません。いわば、琉球側の主体的な問題にも注目する必要があります。大交易時代を推進できる国内体制の構築、という問題です。その1つは船を造る技術、それから船を操作する操船術です。これらの技術を、最初は中国から導入しました。福建から多くの人材を招くのですが、北京政府は鎖国政策をとっており、中国人は海外に出られないわけですから、うまく交渉して彼らを受け入れた。先端の技術者である中国人を取り込んで、彼らを活用するという戦略でした。やがて技術移転が成功して琉球は自前の態勢を構築します。その当時の中国の船はジャンク船と一般に言われていますが、世界有数の性能を誇る船でありました。その当時、世界的な規模では西のアラビア海のダウという船と、東のジャンク船という高いレベルの船でした。このジャンク船を導入し、先端技術者である中国の福建人を琉球に招いて彼らを活用するという、外部人材の積極的な活用戦略を推進したのです。そしてもう1つの大事な問題は、アジア交流事業は、一体誰が経営したのか、という問題です。

～国営事業としてすすめられた海外交流～

アジアにまたがる琉球の海外交流事業ですが、それは民間の事業者が行ったのではなく、当時の琉球王国そのものが国営事業としてこの事業を推進した、ということだったのです。その証拠が2頁の資料です。今から450年程前の記録でありまして、『辞令書』、当時は『御朱印』と呼びましたけれども、ひらがなで書いてある資料です。ちょっと読んでみましょう

「しよりの御ミ事、まなばんゑまいる、せぢあらとミがちくどのハ、□□□かねこほりの、一人まさぶろてこぐニ、たまわり申候、しよりよりまさぶろてこぐの方へまいる。嘉靖廿年八月十日」。2か所に朱印「首里之印」が押されていますが、この印鑑は首里城の王様が使った公印です。意味は、「まなばん」は東南アジア、具体的にはシャム（タイ）を指します。シャムに派遣される船、名前は「せぢあらとミ」

号ですが、その船には 200 人位のスタッフが乗ります。その中に「ちくどの」という役職があります。その役職に「まさぶろてこぐ」という男を任命する、これは首里城の王様の任命である、との意味です。つまり、海外に出張する人間を王が任命している。王の家来、今で言えば公務員が海外に出張しており、その任命権者は王である、というわけなのです。また、資料 A ですが、アジアに羽ばたく琉球の気概を示した記録だと先ほど紹介しましたが、その鐘はどこに掛けてあったのかというと、首里城に掛けてありました。アジアと交流し、アジアの架け橋になっていると自慢した事業主体は、首里城を本部とする国家の国営交流事業であったので、その鐘は首里城に掛けられていたのです。

～「ヒキ」琉球王国の軍事組織～

当時の琉球の人口は推定で 8 万人位ですけれども、そのような小規模の王国が 4 頁の地図に示したような、アジアに羽ばたく大交易時代をできた。それは琉球最大の組織、最強の人材を抱えていた国家が推進したがゆえに可能であったというわけです。その象徴的な事例は、「ヒキ」と呼ばれた組織です。ナゾに包まれた組織でしたが、私はこの組織の解明に取り組んできて、やっと大体のイメージが分かりました。一種の軍事組織なのです。政治の拠点であった首里城を防衛したり、海外交通の拠点であった那覇港を防衛するための組織です。

昔の琉球には軍隊などいなかったという誤解が流行していますが、そうではなく、「ヒキ」と呼ばれる軍隊が存在していました。その証拠が 2 頁の王が任命した辞令書の中に登場します。「せぢあらとミがちくどの」とは、「せぢあらとミ」という名の船に乗る「ちくどの」と称する役職、という意味です。この船に乗って「まなばん」、今のタイに向かう人々が 200 人位いたわけです。外交や貿易に従事するスタッフたち、船を操作するクルー、乗組員たちがいて、さらには一種のガードマンたちが乗り組んでいたのです。航海の途中、海賊が襲うかもしれません。アユタヤの町に到着し外交や貿易の活動を行うときに、琉球のスタッフたちの安全を守るための仕事も必要です。そういう警備を担当したメンバーたちの主任が、実は「ちくどの」なのです。王から辞令をもらった「まさぶろてこぐ」という人は、「せぢあらとみ」号と琉球人たちの安全を任された責任者だったのです。

ヒキという組織は 12 のチームから編成されていました。1 チームは大体 40～50 人と想定されます。そのヒキが一定のローテーションを組んで、あるチームは首里城の警備、別のチーム是那覇港の防衛、他のチームは海外渡航船の警備というふうに、役割を分担していたのです。したがって、大交易時代を推進するために、ヒキという独自の組織を持っていたことに注目すべきだと思います。

実際に当時の記録を見ますと、しばしば福建の沿岸で海賊に襲われております。マラッカという国にやってきたポルトガル人、トメ・ピレスが書いた本によりますと、琉球人は相手が不正なことをすると、剣を手にして相手に正当な取引を要求する。琉球人は腰に 2 本の刀を差していて、長い刀はトルコの大刀のようだとも。日本刀を 2 本差して行動する琉球人、それがヒキという組織に属する者たちのイメージだと、私は考えています。

～ヨーロッパの文献にみる琉球人～

もう 1 つ注目すべき事実は、今から 450 年前にシャムのアユタヤにやってきたポルトガル人、ディエゴ・デ・フレイタスが書いたレポートの中に登場します。彼はアユタヤで琉球船の船長やスタッフたちと親しくなり、何度か彼らの船に遊びに行った。そのとき船長は自分にこう説明してくれた。私は琉球の王から厳しい命令を受けている、と。それは何かとフレイタスが尋ねたら、「アユタヤに出向いた全ての琉球人を必ず帰国させろ」、という厳しい命令だと答えた。別の日にフレイタスが琉球の船に遊びに行くと、そこで彼は衝撃的なものを目撃したのですね。アユタヤで死んだ 3 名の琉球人が、塩漬けにして保存されていたのです。死んでもなお琉球人は国に帰らないといけないのか、それほど厳しい掟なのだ、と、フレイタスは感想を述べています。つまり、王の家来、いわば公務員として海外出張しているのですから、帰国義務が課せられていたわけで、例えば民間の中国人のように華僑として現地に定着するということはありません。琉球の大交易時代が、国営事業として営まれていたことを裏付けるエピソードだと思います。

～祈る女神たち～

1枚目のペーパーに戻りましょう。男たちは北へ、西へ、南へと海外出張し、性能の良い船に乗り、ヒキという軍事的な組織のメンバーとして活動していたわけですが、では女性たちはどうしていたのか、このことにも当然注目しなければなりません。海外に渡航する船の中に、もしかしたら女性たちも含まれていたのではないかと調べてきましたが、今のところ1つも事例は出てきません。では、琉球の女性たちは何をしていたのか。ペーパーに「祈る神女たち」と書きましたけれども、実は女性たちの仕事は祈ることだったのです。海外に出張する琉球の男たちは、彼女たちの夫や息子、兄弟、恋人、あるいは親戚だったわけですから、彼らの無事を神に祈ったのです。その祈りは私的な行為であるという側面もありますが、大事な点は、琉球という国家や共同体のための祈りだったということです。わかりやすく言うと、組織としての祈りでした。その証拠が神歌を集めた「おもろさうし」22巻でして、この歌集は首里城の政府が編集したものです。15世紀から16世紀初期にかけての歌と推定される、代表的な1首を紹介します。こんなふうにごうのです。

「おれづむが たちよれば あがあしやつ かみあしあげ おなりがみ てづりよら 大きみに まはゑ こうて はりやせ わかなつが たちよれば」。古い琉球語で書いてあり、沖縄方言が得意だと自慢する現在の沖縄県民には理解できません。昔の音を表記するために、日本から借用したひらがなで書かれています。「おれづむ」は夏に入る前のシーズン、「わかなつ」はその同義語です。南からの風が吹いてくる頃ですね。この季節になったから、「おなりがみ」、つまり女性たちは「大きみ」、つまり神様に祈ったのです。「てづりよら」と書いてありますので、手を擦り合わせて、懸命に祈りました。どうか南からの順風が吹きますように、その風を受けて、男どもの乗った船が無事に琉球に帰還できますように、と歌ったのです。つまりこの歌は、東南アジアに出かけていった貿易船が南からの風を受けて、無事に那覇に戻ってきますようにという強い気持ちを込めた歌だと思います。

先程紹介したタイとシャム間に派遣された「せぢあらとミ」号ですが、「せぢあら」とは、琉球の古い

言葉で霊力が高く非常にパワフルな、という意味です。宗教的、精神的なネーミングがちゃんと付けられている。誰が付けたかという、神に祈る女性たちです。

船が建造され、進水式を迎えます。当時の言葉で「すらおろし」と言いました。その船は海に浮かんで、そしてこれからアジアの荒海に乗り出していきます。その船の航海安全を願い、大いなる働きをしてくれる願いを込めて名前を付けるのですが、命名者は実は女性たちでした。祈る存在として、女性たちは当時の国営事業であったアジアとの交流を支えていたということでもあります。

●「大交易時代」の終焉

～国際環境の変化—受け継がれる交流の成果 サンシン・泡盛～

しかし、やがてそういう時代は終わります。いつの時代でも、歴史というものは変化していきます。その原因の1つは、中国明帝国の弱体化です。対外政策や鎖国政策が維持できなくなり、中国人パワーが自由に海外に展開するようになって、琉球の競争相手が強力に台頭した。やがてスペイン、ポルトガルがアジアに進出してきました。彼らもまた琉球にとって、手ごわいライバルになっていきました。日本の海外貿易勢力も登場します。やがて琉球の交流範囲は小さくなり、朝鮮ルートを失い、東南アジアルートを失って、中国、日本という東アジアの2つの大国の間を取り持つ存在になっていくわけです。

しかし、大交易時代には様々な成果があったわけですが、その代表が沖縄を代表する楽器サンシンでした。中国から入ってきた三弦楽器、胴にニシキヘビの皮が貼ってあるその楽器が入ってきて、琉球の音楽と融合してサンシンに発展していきました。それから中国南部や東南アジアにおいて米を原料とする蒸留酒製造の技術があり、その技術が入ってきて、沖縄を代表する泡盛として磨かれていきました。サンシンや泡盛は、大交易時代の遺産であり、今では県民生活にとってなくてはならないものになっています。

●おわりに

～「沖縄の夢」を実現できる確かな戦略、実践力を！～

アジアに羽ばたいた大交易時代を過去の話として終わらせるのではなく、再びその時代を実現しよう、つまり 21 世紀の大交易時代を作ろうという沖縄県の計画や国の計画が検討されてきました。数年前に県が策定した沖縄 21 世紀ビジョンという将来戦略も、このテーマを掲げております。それを実現するためには、国や県、民間事業者が連携しながら追求していくということが大事だと思います。国営事業としての琉球王国のアジアとの交流の話をしましたけれども、ここで一番注目して欲しいのは、人口 8 万人程度の小規模の国が、中国の優遇政策などを活かしながら、その事業を推進できる主体を作り上げていたことです。万国津梁という文句は絵空事ではなくて、実際にその時代を自分たちの力で達成したことです。

講演レジュメに書きましたように、戦略やビジョンを作り、それを練っていく必要はありますけれども、最も肝心なことは実践すること、行動力だろうと思います。沖縄が日本に復帰して 40 年余が経ちましたけれども、その間に様々な振興計画において大交易時代を目指そうというビジョンが描かれてきました。ピクチャーを示すことに止まらず、それをどう達成できるかという実践力が問われているのです。

幸い那覇空港を活用した国際物流のハブが成長しています。まさに、沖縄がアジアの玄関になりつつあります。長い間、沖縄は南の辺境の県だと見られてきましたけれども、しかし現在では元気のある、ダイナミックなアジアに最も近い場所になりました。那覇空港の国際物流ハブはそれを証明していると思いますが、さらに港湾機能を整備し、船と海を活用する物流の拠点を目指す必要があります。そのレベルアップを実現するためには何が必要なのか、ということが問われているのだと思います。

雑駁な話になりましたし、うまく説明できたかどうか自信もありませんが、私のお喋りはこの程度にしまして、ご質問がありましたらお答えしたいと思います。ご清聴、ありがとうございました。

● 質疑応答

【質問者】 沖縄の 21 世紀の万国津梁を実現したいと考えております、琉球海運株式会社の山城と申します。よろしくお願ひします。今日は大変貴重なお話をありがとうございました。沖縄が明に庇護をされながらも、しかし後半に自立して造船とか航海技術を磁力でやっていたというのは大変誇らしく思っております。やっぱり海運人として大変興味があるところなんですけれど、先程乗組員が 200 名と仰ったんですかね。それは大変な船だと思っているんですよね。そういうことで先生の本でしたか、コロンブスがアメリカに新大陸を発見した船よりも遥かに大きかったというような話を伺ったような気がするんですが、大体どの程度の大きさだったのか、よろしければお聞かせ頂けますか。

【高良教授】 山城さんのご質問にお答えします。コロンブスが新大陸を発見したときに使った船は「サンタマリア号」ですけれども、ハリウッド映画を作る際に「サンタマリア号」を復元したのです。復元されたその船がスペインのバルセロナに展示されています。私は見ましたけれども、それほど大きな船ではありません。「サンタマリア号」に比べると、琉球の当時の船は 2 つの点で勝っていたと思います。1 つは大きさです。船の船首から船尾まで大体 35 から 40 メートル、幅が 10 メートル位あります。200 名ほどの乗員が乗り、大量の貿易品を積むスペースがありました。もう 1 つ注目されるのは、「サンタマリア号」を見たらすぐに分かりますけれども、ワンルームの構造です。船の舷が破れ浸水しますと大変です。コロンブスの航海日誌を見ますと、浸水し、それを押さえるのにノイローゼになるような状況が出てきます。

琉球の船、つまりジャンク船はなぜ優れていたかという点、40 メートル位の船体が多くの部屋、隔壁と言いますけれども、それで区切られていたのです。そういう構造でしたので、浸水してもその部屋だけで食い止めることができました。現在も使われている構造船の技術、その原型はジャンク船だと言われています。そういう先端技術を持っていたために、琉球の人々はアジアの荒海を航海することが可能だったのです。

そして、琉球の船は中国三大発明の 1 つと言われている羅針盤も装備していました。また、石火矢とい

う火器も装備していきまして、海賊を撃退する際に効果があったと思われます。

【質問者】 ありがとうございました。

海洋王国・琉球——その歴史、文化

講師：高良倉吉（琉球大学名誉教授・琉球史）

1 琉球王国「大交易時代」の概要

2 なぜ、その時代を実現することができたのか？

① 大明帝国の政策および琉球優遇策

冊封と朝貢、貢期、入城港の指定、海禁政策
馬と硫黄、倭寇対策、貢期の緩和、船舶の無償支給

② 国内体制の構築

造船・航海技術の導入、中国人（特に福建人）の活用
国営事業、ヒキと呼ばれた組織

③ 祈る神女たち

3 「大交易時代」の終焉、その後

国際環境の変化、交流範囲の縮小
受け継がれる交流の成果（サンシン、泡盛など）

4 むすび——「沖縄の夢」を実現できる確かな戦略、実践力を！

[参考文献]

高良倉吉『琉球の時代』（1980年、筑摩書房、2012年ちくま学芸文庫）

高良『琉球王国』（1993年、岩波新書）

高良『アジアのなかの琉球王国』（1998年、吉川弘文館）

赤嶺守『琉球王国』（2004年、講談社）

資料 A

万国津梁の鐘（1458 年）

琉球国は南海の勝地にして、三韓の秀を鍾め、大明を以て輔車となし、日域を以て唇齒となす。此の二の中間に在りて、湧出する蓬莱島なり。舟楫を以て万国の津梁となし、異産至宝は十方刹に充満せり。[以下、略]

資料 B

辞令書＝御朱印（1541 年）

しよりの御ミ事

まなぼんゑまいる
せじあらとミがちくどのハ
□□□かねこほりの
一人まさぶろてこぐニ
たまわり申候

しよりよりまさぶろてこぐの方へまいる

嘉靖廿年八月十日

(注) 上部左右に朱印「首里之印」を押印

資料 C

オモロの一節（15～16 世紀）

一 おれづむが たちよれば
あがあしやつ かみあしあげ
おなりがみ てづりよら
大きみに
まはゑ こうて はりやせ

又 わかなつが たちよれば

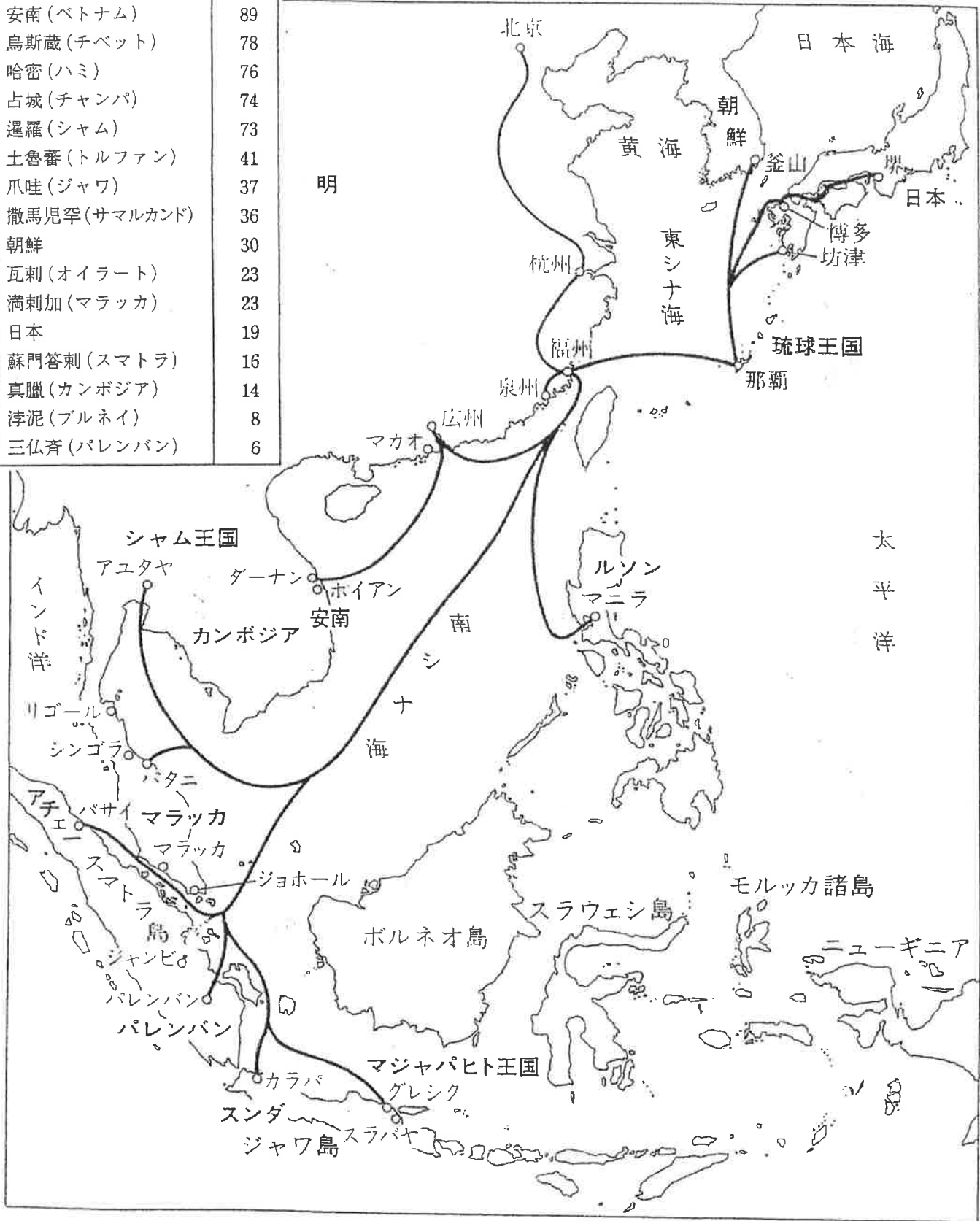
(『おもろさうし』巻13)

日本全体		琉球・沖縄をめぐる主な動き	
旧石器時代	先	* 港川人 (18,000年前)	琉球王国時代
縄文時代	史	* 沖縄にも縄文文化が展開	
弥生時代	時	* 弥生式土器の出土	
古墳時代	代		
奈良時代		* 日本と一定の交流が存在	
平安時代			
鎌倉時代			
南北朝時代	古	* 沖縄各地で大型グスクが登場	
室町時代	琉	★ 琉球王国の成立 (1429年)	
戦国時代	球	★ アジア諸国と活発に交流 (万国津梁の鐘、1458年)	
徳川時代		★ 薩摩軍の侵攻 (1609年)	
	近	* 日本・中国とのバランス関係維持、文化の発展	
	世	* ペリー艦隊来航 (1853～54年)	
明治			
	近	★ 琉球処分 (沖縄県設置、1879年＝明治12)	
大正	代	* 海外移民、出稼ぎ者の増加	
	代	* ソテツ地獄 (沖縄経済の破綻)	
昭和	現		
	代	★ 沖縄戦 (1945年)	
	戦	* アメリカ統治時代 (27年間)	
	後	★ 日本復帰 (1972年＝昭和47)	
	・	* 沖縄振興開発の推進	
平成	現	* 首里城の復元 (1992年)	
	代	* 九州・沖縄サミット (2000年)	

アジア諸国の対明朝貢回数

	国名・地域名	回数
1	琉球	171
2	安南(ベトナム)	89
3	烏斯蔵(チベット)	78
4	哈密(ハミ)	76
5	占城(チャンパ)	74
6	暹羅(シヤム)	73
7	土魯番(トルファン)	41
8	爪哇(ジャワ)	37
9	撒馬兒罕(サマルカンド)	36
10	朝鮮	30
11	瓦剌(オイラート)	23
12	満刺加(マラッカ)	23
13	日本	19
14	蘇門答刺(スマトラ)	16
15	真臘(カンボジア)	14
16	淳泥(ブルネイ)	8
17	三仏齊(パレンバン)	6

←「明史」に見るアジア諸国の対明朝貢回数



琉球王国交易ルート概念図(14世紀末~16世紀後期)

(高良倉吉『アジアのなかの琉球王国』、1998年、吉川弘文館より)